

Kiko

カンクン

気候ネットワーク

〒604-8124 京都府京都市中京区高倉通四条上ル高倉ビル 305 Tel: 075-254-1011 / Fax: 075-254-1012

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-7-3 半蔵門ウツドフィールド 2F Tel: 03-3263-9210 / Fax: 03-3263-9463

E-mail: kyoto@kiconet.org (京都) tokyo@kiconet.org (東京) URL: http://www.kiconet.org/

気候ネットワークは、地球温暖化対策に取り組む市民のためのネットワークです。

「Kiko」は、温暖化問題の国際交渉の状況を伝えるための会期内、会場からの通信です。

カンクン会議で 確実な成果を

11月29日～12月10日の日程で、陽光きらめくメキシコのカンクンで、気候変動枠組条約第16回会議及び京都議定書第6回締約国会議(COP16/CMP6)が始まった。

昨年のコペンハーゲン会議で2013年からの次期枠組みへの合意に達しなかったことを受け、引き続き交渉が続けられているが、ここカンクンでも最終合意が得られそうにないのが現状だ。南アフリカ・ダーバンでの開催が決まった来年末のCOP17/CMP7で最終合意というのが今のスケジュール感だ。そのため全体に、今会議への期待値が低いのは否めない。

しかし、1年、また1年と合意を先のばしすることは、2020年より相当早くに世界の排出量のピークを迎えて削減しなければならないという状況の中で、より甚大な悪影響をもたらすリスクを高めているという事実を忘れてはならない。

カンクンでは最終合意にはならないにせよ、成果の薄い、すぐに忘れ去られてしまうような単なる通過点にしてしまっではいけない。

南アフリカで合意すべき法的性格を明らかにし、緩和・適応・技術・資金・森林減少対策等の重要な項目で実質的な合意をし、南アフリカまでの交渉の作業計画やプロセスに合意することが不可欠だ。

カンクンは、そのための歩み寄りの交渉に入るべき会議である。

高まる日本批判 「日本は交渉を壊すつもりなのか？」

日本政府のAWG総会での発言が、会議3日間の大きな話題となっている。日本は京都議定書を自ら葬るのかと、各国が疑念を抱いているのだ。

国際NGOのネットワークCANが毎日会議場で発行する「eco」でもその様子を取り上げ、批判をしている。そこにも書かれているよう、1つの合意を求めること自体が問題なのではなく、京都をすっかり葬ろうとしているかのような交渉姿勢が、何よりも歩み寄りが必要な交渉の足を引っ張っているというわけである。このまま2週目の交渉に入れば、日本は合意をまとめる気持ちがあるのかとの言われても仕方がない。中国と対話を一層難しくするような交渉姿勢で、どうして米中の参加を実現することができるのだろうか？

週末には、松本龍環境大臣が到着する。名古屋のCOP10で議長を務めた大臣は、各国の妥協を引き出す交渉の中で合意を取り付けたことは国際的にも高く評価された。このカンクンでも、そのような建設的な交渉が日本に求められていることを受け止めて、ハイレベルの交渉を担って下さることに期待したい。

日本、どんな状況でも「京都」にノー (eco12/1 抄訳)

最もリーダーシップが求められているとき、京都議定書が生み出した国が、議定書AWG総会で破壊的な発言をした。「日本は、どんな条件下でも、どんな状況下でも、京都議定書の下で(削減)目標を記すことはない」と発言し、京都議定書の第2約束期間の延長を否定したのだ。

ひとつの条約を志向するのはいいのだが、強く「京都」の将来を否定するのは全く別問題だ。この声明は多くの締約国を動揺させ、非建設的な雰囲気を生んだ。今回のCOPは締約国間の信頼を再構築する場になることが求められていたが、日本の動きは、信頼を損ねただけでなく、交渉を破綻させる可能性さえ含んでいる。世界が枠組みを強化しようとしているとき、米中にも削減目標を課すべきということを口実にした日本の強硬な姿勢は、ここで何の成果もできない危険にさらしている。

締約国の大多数は、法的拘束力のある成果を求めると言っている。今こそ、京都会議の最後の夜に苦難の末に獲得した法的拘束力のある協定を固守すべきだ。先進国は京都議定書の下で削減義務を負い続け、アメリカは条約に基づく長期的な協力行動の下で比較可能な努力を行い、途上国は先進国からの資金・技術・能力開発の支援を受けて適正な削減行動を行うと全締約国がバリエで合意した基本枠組みを、日本は尊重すべきだ。

日本は本当に、最も美しい都市のひとつで生まれた京都議定書の墓所として有名になりたいのだろうか？

化石賞 1 位に復帰！

毎日の国際交渉で、最も後ろ向きな交渉姿勢や発言をした国に贈る『化石賞』。国際交渉会議の名物であり、世界のメディアも注目している。

1日、「日本は、どんな条件でも、どんな状況下でも、京都議定書の第2約束期間の削減目標を記さない」という発言を理由に、日本は化石賞の1位を受賞した。

会議前半3日間の様子

さて、今回の会議では、以下の6つの会議が開催される。

1. 気候変動枠組条約締約国会議 (COP)
2. 京都議定書締約国会合 (COP/CMP)
3. 実施に関する補助機関会合 (SBI)
4. 科学的、技術的助言に関する補助機関会合 (SBSTA)
5. 条約の下での特別作業部会 (条約 AWG)
6. 議定書の下での特別作業部会 (議定書 AWG)

このうち最も注目を集めている、2013年以降の次期枠組みに関する交渉は、条約 AWG と議定書 AWG で行われる。

条約 AWG では、これまで通り「長期のビジョン」「適応」「緩和」「資金・技術移転・キャパシティ・ビルディング」の草稿グループに分かれて議論を行うことになった。議長が会議直前に用意したカンクンで合意する要素の決議案を基に議論するか、あるいは天津会議までに作り上げてきた交渉テキストを基に議論するかについてはどうもはっきりしていない。午後で開催された議定書 AWG では、「先進国の削減目標に関する3条9項の改正」「森林などの吸収源」「市場メカニズム」「削減対策による潜在的影響可能性」に分かれて議論されることになった。しかしこの日に最も注目されたのは、あまりにもきつい日本からの発言である。「日本は新たな一つの合意を求めており、すべての国が参加する条約の中でしか合意できない」「主要排出国が参加しない京都議定書は気候変動対策に効果的ではない」「いかなる状況においても日本が京都議定書の下での第2約束期間の削減目標を約束することはない」と厳しい調子で発言し、途上国を怒らせただけでな

く、その激しい言い方で世界を驚かせた。そして化石賞も授与され、会議中に国際 NGO のネットワーク CAN が発行する eco に厳しく取り上げられる羽目に陥った (eco12/1 記事参照)。1日に開催した日本政府の記者会見では、海外のメディアから「京都議定書を破棄するような言い方だったが・・・?」「ある締約国は日本がこの会議で最も有害な役割を果たしていると言っているが?」と質問攻めにあっている。政府側は「これは元々のポジションで、新しいものではない」「日本は削減もするし、資金支援も約束した」「議定書を破棄する訳ではない。気候変動を解決するための効果的な合意をするために一生懸命頑張っているのだ」と弁明に必死だった。しかしメディアからは「効果的な合意はもちろん必要だが、その前にこの交渉が壊れないようにする必要があるのでないか」と更に突っ込まれる状況だった。

途上国と先進国の信頼関係を取り戻して合意をしなければならない会議で、日本が初日からこのような形で会場の話題をさらったのは本当に残念である。

国際 NGO も強く批判

日本の発言に対し、国際 NGO も強く批判をしている。

WWF は、日本政府の記者会見の前に次のコメントを出し、国際メディアに訴えた。「会議初日に京都議定書第2約束期間を激しく否定することは、これから2週間継続する交渉に非常に悪い影響を与え、昨年25%を発表した日本のリーダーシップを著しく損なうものである。このままでは日本は国際社会から孤立する。菅首相はすみやかに態度を改め、交渉に建設的に貢献するよう、日本交渉団に指示を出すべきである」

Friends of the Earth (FoE) は、日本が京都議定書第二約束期間の拒否を明言し、カンクン会合に期待される気候交渉の前進を阻む最大の脅威となっていることに対し、1日に記者会見を開き、日本の姿勢は先進国としての歴史的な排出責任を放棄し、また国際社会のモラルに反するという懸念を発表した。また、国際ネットワークを通して、カンクンの気候交渉の成功を期待する世界中の人々や

日本の市民に呼び掛け、管総理大臣に向けて京都議定書を拒否する姿勢を改め、気候交渉の進展に協力するよう求めるサイバーアクションを開始した。

http://www.foejapan.org/climate/doc/COP16_action.html

オックスファムは、「このたびの日本政府の表明は、世界の気候変動対策の生命線の一つを断ち切りかねません。深刻な旱魃や洪水に苦しむ世界の貧しい人々が必要としているのは、京都議定書が設定した拘束力ある排出削減の枠組みの弱体化ではなく、そのさらなる強化です」とする声明を現地及び日本で発表した。

さらに2日には、WWF とオックスファムなど国際 NGO は、そろって「Love Kyoto」のスタントを行った。これは日本と京都議定書の関係を結婚に例えて、13年間にわたって一緒にいたのに、無残に棄てるのかと問いかけるもので、「別れを告げるのではなく、愛し続けてちょうだい」と訴えるものである。会場には3メートル大のピンクのハートが登場し、浴衣姿の日本人学生を含む30人が「私を棄てないで、愛し続けて」と声をそろえて訴えた。会場を歩きかう交渉団は途上国を中心に積極的にスタントに参加し、口々に日本政府の非難を繰り返していた。このスタントは多くのメディアの注目を集め、会場にはテレビカメラやペンを手にしたジャーナリストが英語とスペイン語で熱心に取材していた。

青い海、まぶしい太陽、そして、長い長いバスの道のり

カンクンは、予想していた以上のリゾート地。エメラルドグリーンに輝く海は、楽園か天国か、という場所だ。しかし、会議関係者はビーチでゆっくりする時間もなく、逆に、ホテルからカンクンメッセ、カンクンメッセから会場のムーンパレスホテルへ、片道約1時間の通勤...。会場の不便さへの批判もあちらこちらから聞こえてくる。

Kiko

COP16/CMP6 通信 No. 1

2010年12月2日発行

大久保ゆり、佐藤由美、小西雅子、平田仁子、柳井真結子

E-mail: khirata@kiconet.org